

とんぼのめがね

Date

No.

「私たちが委ねられたもの」(Ⅱテモテ1:3-14) 臼井 勲

「そういうわけで、私はあなたに思い起してほしいのです。私の按手によってあなたのうちに与えられた神の賜物を、再び燃え立たせてください。…自分に委ねられた良いのを、私たちのうちに宿る聖霊によって守りなさい。」(Ⅱテモテ1:6.14)

去年の最後の説教は、12月25日のクリスマス主日礼拝でした。また、今年の1月1日(元旦)も主日に当り僕は平塚教会で説教いたしました。そして今日、12月31日(大晦)が主日礼拝説教になりました。とても不思議なめぐり合せだと思っています。そして今日は、通常から離れ、僕自身の今までの生涯を振り返った証詞を通して、このテモテへあてたパウロの手紙から示されたメッセージをお話したいと思います。僕は、若い頃、自分の証しをするときにこのテモテの記事を引用して話しました。テモテは、パウロが2回伝道旅行のとき、パウロの故郷タルサからそう遠くない小アジアのルカオニア地方の町ルストラの出身で、母親はエフヤ人の家係で、祖母ロイスも、母のエニケも、熱心なキリスト信徒でした。父親はギリヤ人だと言われています。最近、二代目の信徒を「宗教2世」と言っているように、テモテは20才前後にキリスト者になり、以後ずっと、パウロを助ける「同労者」と呼ばれていて、パウロの「メッセンジャー・ボーイ」の働きをし、諸教会に遣わされました。パウロがローマ獄中にいたときも、いつも一緒にパウロを援けました。パウロが彼に書いた手紙を読むと、2代目キリスト者である僕の生涯と重なる所が多い事に気付かされます。僕の場合、父が熱心なキリスト者であった事は、すべて皆さまに語ってきました。今日は、僕の母の信仰についてお話しようと思います。母の秀子は、東京都の大田区大森の生れで、生家は当時としては大きなクリーニング工場を営む12人の大家族で、兄が長くさんいて、末の方の3人姉妹の長女でした。祖父母は、日蓮宗本門寺の檀家で、とても熱心な信者でした。不思議のことに祖父はキリスト教にも理解ある人で、母と叔母とミッシェン系の女学校「須賀学園」に通わせました。母は21才で父昇と結婚しました。父は31才で、床や2世でした。その頃上海事変で出兵し、中国から戻っていました。父はすべてキリスト者で、隅田川の永代橋東詰にある床やに嫁いだわけです。まもなく僕が母の胎にいたとき、父は2度目の召集で上海に出征しました。僕が1才のとき父が無事帰還し、まもなく弟弘が生まれました。昭和19年になると戦況は危くなり、父はベテランの衛生兵でしたので、3度目の召集を恐れ、それを避けるため父の妹(叔母)の主人が平塚で始めた軍需工場で働くため平塚市に移住しました。その工場は平塚駅西口にあつて、両親は近くのアパートに住み、そこから工場に通っていました。昭和20年7月14日、多数のB29機が海軍火薬庫がある平塚市を空襲し、平塚市は灰塵に帰りました。両親は海岸の松林に逃げ無事でした。僕と弟とは祖父の別荘だった鶴見に疎開していました。父は20才で東京本場ホリネス教会で受洗していましたが、戦争中で教会生活はできませんでした。父は焼け出されて、平塚駅南口の現在の所で、父が床や業を始めました。すこし生活が順調になり、やっと教会へ行き始めた。それは近くの須賀キリスト教会(福音キリスト教会)だった。戦前からある教会で、英国のバプティスト宣教師の流に属する「活水の群羊」に属し、その頃は戦中の迫害期の影響で、混乱していて無数の教会が多かった。しかしこの教会の熱心な教人の役員たちが、戦後すぐに京都でリバイバルの活動を始め、大槻武二師の「聖イソ会」(46年1月に設立)に着目し、これに加盟し、平塚の須賀教会を本部とした。ちょうどその時期に父が行き始めたのでした。やはりいち早く加わったホリネス教会の斎藤源八牧師が平塚教会の牧師になられた。とてもすぐれた高名な牧師で、父はこの先生の説教に感銘して、日曜日を休日とする決心をして、母に先ず相談すると、母はそのときまだキリスト者ではなかつたが、「あなたの信仰の決心ですから、おやりなさい」と賛成したと言う。常識的には、最大の稼ぎ

目を休むことは、主婦にとって経済的な影響をもうけることから猛反対されると思った父は驚いた
で言う。母の心の中にどんなことが起ったのか知るよしもないが、この「聖日厳守」による礼拝出席を
実行することで母に多大なきせいを強いることになったが、それに勝る祝福は母も礼拝出席するよ
うになって信仰を持ちキリスト者となったことでした。僕はすうと後になって母の受洗のことをも
と詳しく知りたいと思ったが母の受洗は周もなく、急に聖公会に入った事で、教会の中
に争いが起き、青藤牧師は「主の兄弟は争うべからず」と言って、潔き身を引き、事
を治めたのでした。正に主イエスの「平和をつくる人は幸いです」と地
でいた解決だった。それからわすかの周市内で聖公会の集會が続いたが、青藤先生がホ
リネズ教会に戻った事で、須賀教会の長い百年以上の歴史で、この4年間は空白の期
間として記録されている。しかし、この4年の中で、父の信仰がリバイブし、母は信
仰を与えられ、「ルテヤ」と云う洗礼名を得た唯一の信徒だったわけである。そん
な中で、母は病に倒れ32才の若さで天に召された。父は周もなく三上さん
を介して聖契の群に加わった。数ヶ月後に、5人の子供を抱えた父の所に、た
だキリスト者の家と云うだけで新しい母さまが来てくれたのです。この母は私
たちを真によく世話してくれ、92才で召されるまで共に暮らし、その思儀は筆
舌にワセない。感謝の事にその葬式は僕が弔務することになりました。僕
の信仰は、この新しい聖契キリスト教会の中で、とてもよい雰囲気の中で育
ちました。主イエスが若い僕に委ねられたのは、亡くなった母の故郷への伝道
の思いでした。生母の実家の鶴見には、叔母たちやいとこたちがたくさん
いた。新しい母が来たことで、しばらく鶴見の家とは疎縁になって
いたのだが、祖父の葬儀を機に縁が復活し、高校生になる頃からひんぱんに
訪れるようになった。特に僕も弟も大学に通う途中まで、よく近くなった
のを機に二人の叔母の家で家庭集會を持つようになった。そうするうちに、
牧師や教団の青年たちが協力してくれ、近くの公民館での集會が出来
るようになり、教団も協力してくれ、特別伝道会も催すようになった。
教団が本腰を入れて現在の所に土地を手に入れ、現在の鶴見教会へと発展
したのでした。当時の僕の心を動かしたのは、母への思いでした。母をなく
した最初の頃は、神への不信と死への恐怖が僕を強くどらえていま
した。主イエスの復活信仰によって、それらを乗り越え、僕の心の内には、
母は僕の心やからだの一部となって僕の中で生きているという確信が
生れました。パウロがテモテに指摘したように「祖母ロイスと母エネ
の内に宿った主イエスの愛であり、僕の母を信仰に導いたイエスの愛
でした。よく父が証言していた「母の臨終のとき、父は母に『主
イエスを信じるか』と問うと母は大きく頷いて息をひきとった。その
ときからともなく、『神は愛なり』の聲が聞えた」と言うことは、
真実であると思うのです。若かった僕に「私の按手をもって、
あなたのうちに与えられた神の賜物を再び燃え立たせてください。
神が私たちに与えてくださったものは、お金の重さではなく、
力と愛と慎みの重さです」と響いたのでした。父が32才で召されたとき、
自分のこれから生き方を考えたとき、僕は、当時まだ元気で
おられた僕らの結婚の仲人をしてくださった母の信仰の友でも
あった永岡の小母様に、洗礼を受けたばかりの母の事を
聞きました。「秀子さんは「ルテヤ」という名を頂き、それは喜んで
信仰に燃えいきいきとしていますよ」と彼女は答えてくだ
さいました。それを聞き、僕は「この母の名の「ルテヤ」を断
ちてはならない。青藤先生がどのような思いで、この名を
くださったのか、僕は、母はもと長く生きて、このルテヤ
のように生きたいと思っていたにちがいない。僕は
これから、この母の思いを生かしたい。僕が生きることは
母が生きることとちがいない。「自分に委ねられた
良いものを、私たちのうちに宿る聖霊により守りなさい」。
僕の中には、母に委ねられたのと同じ、良いものが
たくさんある。僕は父がなきあとの、50歳からの人生をこの
思いで生きようと決心したのでした。私たちの人生は、
むおそいと云うことはないのです。私たち一人一人の
うちに、その人にしか出来ない、主から委ねられた
良いものがあります。それを再び燃え立たせま
しょう。